人間福祉研究
Human Welfare Studies
2008 No. 11, 159－170

青年期における「生きにくさ」の構造についての検討
大学生への質問紙調査によるKJ法分析の結果から

飯田昭人※　佐藤祐基※※　新川貴紀※※※
川崎直樹※※※※

Ⅰ　問題の背景

1.「生きにくさ」という言葉について

心理臨床の領域に限らず，対人援助職に従事している者は，相談者（利用者，クライエントなどを含む）から「生きにくさ」や「生きづらさ」に関連した事柄が語られるのを聞くに違いない。また援助者（治療者，専門家などを含む）自身が，眼前の相談者の言動等から彼らの「生きにくさ」を感じることがあるであろう。

あるとき，非行少年がぽつりと「親とも学校ともうまくいかない。何をやってもうまくいかない。俺に将来はない」と筆者の一人（飯田）に話したことがある。彼は彼なりに周囲と歩調を合わせ，適応的に生活しようと試みたものの，それが適わずに非行行為に手を染めていた側面もうかがえた。彼のこれまでの言動から，彼の「生きにくさ」を感じずにはいられなかった。

しかし，「生きにくさ」という概念はあいまいで，結局のところ，その用語を使う人間の主観的な判断によるところが大きい。例えば，周囲からみれば劣悪な環境で生きている子どもがいたとする。この子どもの担任の先生はその子が生きにくさを感じていると思うかもしれない。しかし，その子ども自身は，担任の先生が考えるような生きにくさを必ずしも感じているとは限らないであろう。

このように，「生きにくさ」という用語は，それを用いる人間の思いや価値観などに大きく左右されるものといえよう。

なお，本論で用いている「生きにくさ」という言葉は「生きづらさ」という用語と同義とみなす。

2.「生きにくさ」という言葉が意味するもの

藤野（2007）は『「支援」研究のはじまりにあたって－生きづらさと障害の起源－』において，「生きづらさ」という用語やその概念を，さまざまな角度から検討している。以下に，その藤野の見解を紹介する（一部筆者が修正している）。

社会的実践や研究の場において，「生きづらさ」という用語が用いられたのは，雑誌記事索引によると，1981年の日本精神神経学会総会において「主体的社会関係形成の障害と抑制」として語られたのが最初であるとしている（加藤，1981）。また，「生きにくさ」と

※，※※※，※※※※北翔大学人間福祉学部福祉心理学科
※※北翔大学大学院臨床心理センター
キーワード：青年期，生きにくさ

いう用語はオウム真理教の地下鉄サリン事件を受けて，1997年に『世界』（岩波書店）が現代社会に生きる若者の状況を読み解こうと特集「<生きにくさ>という問題」を組んだのが初出のようである。その後は，これらの用語をタイトルに掲げる論考は増え，現代社会に生きる若者についてのもの（土井，2006ら）や軽度発達障害をもつ人々のもの（田中，2005ら）など，他にも数多く挙げられる。（以上，藤野（2007））。

また，藤野（2007）は「生まれながらにして生きづらさを抱えた人がいるわけではなく，『生きづらさ』はある状況の中でそれとの関係で生じてくるものであろう」と述べつつ，「『生きづらさ』が特定の人たちに対してもちいられている言葉である限り，それは人間が本来的に持っている苦しみや悲しみではない何かを指していると考えるのが妥当であろう」と論を進めている。

児童精神科医であり，発達障害児者やその家族，学校関係者と多く接してきた経験をもつ田中（2007）は「生きづらさ」について次のように述べている。「生きづらさとは，生きがいの獲得の躓きと同義であると考える。生きづらさを考え，そこからの脱却を検討するということは，生きがい感を持ちながら生きる，すなわち『豊かに生きる』という喜望峰を立てることに繋がるだろう」と。また，同じく田中（2007）は若干表現を変え，「生きづらさとは，生きがい感を持ちながら生きる，すなわち『豊かに生きる』ことへの困難さである」としている。

藤野の「（生きづらさとは）人間が本来的に持っている苦しみや悲しみではない何かを指している」ということ，田中の「（生きづらさとは）『豊かに生きる』ことへの困難さである」ということについては，臨床実践に身を置いている者であれば，２人の考え方に大きく異を唱えることはないであろう。

ただ，２人の述べる「生きづらさ」は，やはり「支援者」としてみた見解であり，実際に「生きにくさ」「生きづらさ」を抱えていると感じている人間（「被支援者」）は，それらについてどう思っているのかを，いわば，被支援者の視点で考えていくことも重要ではないだろうか。

特に「生きにくさ」といったものがどういう構造で成り立っているのかは，研究としてはほとんど明らかにされていない。もう少し，「生きにくさ」と呼ばれるものの構造がはっきりすれば，それらへの対応についての議論も活発になるものと思料される。

本研究では，青年期の「生きにくさ」「生きづらさ」というものが，どういった構造で成り立っているのか検討することを目的とする。

Ⅱ　方　　法

１．調査対象

四年制私立大学の２～４年生を対象に調査を実施した。そのうち，著しい記載漏れのある者を除き，合計117名（男性36名，女性81名）を分析の対象とした。平均年齢は20.4歳（$SD = 1.13$）であった。

２．調査手続

調査はＸ年７月及びＸ＋１年１月の２回，大学の講義時間内において実施した。無記名，自由記述方式で行い，実施にあたっては，この調査が講義の評価等とは無関係であること，

得られた情報は研究のみに使用し，個人を特定するようなことはないことを口頭およびフェイスシートにて教示し，フェイスシート上に回答に同意するかを尋ねた。

3．調査材料

本調査では，4つの項目について自由記述方式において回答させた（Table1）。

Table 1　4つの調査項目

①あなたは「生きにくさ」をどのようなものと考えていますか
②あなたはどのようなときに「生きにくさ」を感じますか（感じましたか）
③あなたは「生きやすさ」をどのようなものと考えていますか
④あなたはどのようなときに「生きやすさ」を感じますか（感じましたか）

本論では，①および②における自由記述文章を分析の対象とした。

4．分析方法

生きにくさという概念の構造をとらえていくことを目的としたため，KJ法を採用して分析を行った。具体的には，川喜田（1996）によるKJ法第1ラウンド2を用いて検討した。分析方法については，永石（2007）の方法を参考にした。以下のその手順等について記す。

＜整理・分析の手順＞

①先の質問紙調査において得られた自由記述の原文を，そのまま1項目ずつラベルづくり（原文をカードにタイプしたもの）を行った。

②抽出したラベルについて，内容的に妥当であるか，また内容が重複すると思われる項目については，筆者らのうち2名（飯田，佐藤）で検討を行った。

③採用されたラベルについて，飯田および佐藤によって，KJ法グループ作業法によって整理・分析を行った。各ラベルについて上記2名が意見交換を行いながら，「ラベルのグループ編成（※1）」「図解化（※2）」のプロセスまで行い，相互の関係の検討まで行った。

※1）ラベルのグループ編成とは，関連のあるラベルをひとまとまりにし，そのグループにより抽象度の高い表札をつける。表札のつけられたグループをさらに他のグループとの関わりにおいてグループ化できるかどうか検討する。

※2）グループ化が全て終わったところで，各グループ同士の関係について検討し，視覚的なイメージとしてまとまりのある図となるように空間配置とグループの関係について検討する。

④ここで得られた結果をもとにして，それぞれの表札の意味内容，各グループ間の関連性などについて，分析中の話し合いをもとにして飯田が文章化の作業を行った。

Ⅲ　結果と考察

1．カテゴリーの全体的構造

対象者の自由記述方式における，生きにくさという概念とその全体像を検討した結果をFigure 1に記す。

本調査の結果から，青年期の生きにくさ感については，以下の3つのカテゴリーに分類された（Table2）。

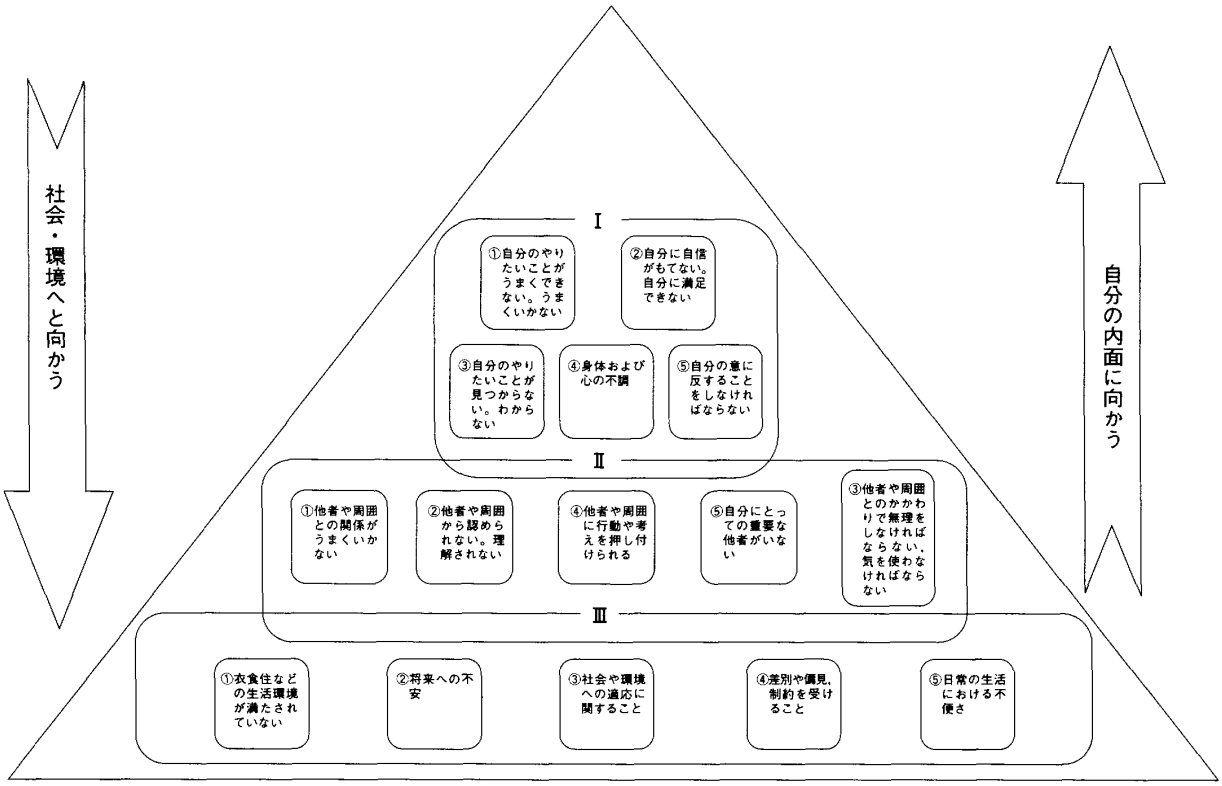

Figure 1　大学生の「生きにくさ」に関する概念図

Table 2

Ⅰ　「自分の思いや気持ちに起因する生きにくさ」カテゴリー
Ⅱ　「自分と他者とのかかわりに起因する生きにくさ」カテゴリー
Ⅲ　「自分と社会・環境とのかかわりに起因する生きにくさ」カテゴリー

先に藤野（2007）が指摘しているように，生きにくさというものは「ある状況の中でそれとの関係で生じてくるものであろう」という，いわば，ある個人の所属する社会や環境との関係によって，生きにくさが生じるという考えが，本調査結果からも得られた。

上記3つのカテゴリーも大きく捉えると，全てが，対象者が社会や環境とのかかわりから生きにくさについて考えられたものといえよう。だが，その中で，データを詳細に検討した結果，Ⅰに関しては自分自身の思いや気持ちといった感情を中心に「生きにくさ」について語られていることから，それを“「自分の思いや気持ちに起因する生きにくさ」カテゴリー”と命名した。

Ⅱに関してもⅠ同様，社会や環境とのかかわりから述べられたものといえるが，その詳細は自分自身と他者とのかかわり（二者関係）の中から生じる生きにくさについて語られていることから，それを“「自分と他者とのかかわりに起因する生きにくさ」カテゴリー”と命名した。

次にⅢに関しては，Ⅰ，Ⅱを除いたものとして，自分自身と社会や環境とのかかわりから生きにくさについて語られていることから，“「自分と社会・環境とのかかわりに起因する生きにくさ」カテゴリー”と命名した。

Table 3

	カテゴリーを構成する側面	回答例
Ⅰ「自分の思いや気持ちに起因する生きにくさカテゴリー」	**①自分のやりたいことができない。うまくいかない。**	・自分の欲求が満たされない ・自分の意見を言えない ・自分のやりたいことがうまくできない ・努力が結果に結びつかない ・何をやってもうまくいかない ・自分の時間がない ・壁にぶち当たったとき ・自分を表現できないとき
	②自分に自信がもてない。	・ふがいない気持ちを感じる ・自分が否定されたとき ・自分を率直に表現できない ・自分に自信がもてないとき。
	③自分のやりたいことが見つからない。自分という存在がわからない。	・自分の生きる意味がわからないとき ・毎日が退屈 ・自分のやりたいことがみつからない ・自分に夢や目標がない ・自分という存在に疑問を感じたとき ・自分がわからなくなったとき
	④身体および心の不調を感じる	・息苦しさを感じる ・孤独 ・悩みがある ・疲れている ・生きているのがつらい ・ストレスを感じる ・不安を感じる ・自分の気持ちと行動が一致しないとき
	⑤自分の意に反することをしなければならない。	・もうやってられないと思うとき ・自分が納得できないことをしなければならないとき ・辛い現実を受け入れなければならないとき

以上のように，「大学生が考える生きにくさとは何か，どういうときに生きにくさを感じるか」という検討を通し，上記の3つのカテゴリーを得た。

以下に，各カテゴリーを構成するグループによる詳細を文章化した説明を通して結果を示していく。ここで，各グループに整理されたラベルの概要とそのラベルにより構成されている概念や意味内容，さらにグループ相互の関連について考察する。ラベルの概要を示すために，Table 3，Table 5，Table 7において各カテゴリーのラベルの要約が示してある。これは対象者の自由記述文章を要約したものである。

2．各下位カテゴリーの特徴

Ⅰ　「自分の思いや気持ちに起因する生きにくさ」カテゴリーについて（Table 3）

自由記述式の文章としては，このカテゴリーに属するものが全体の半数以上であり，大学生の多くは，生きにくさというものについて，思いや気持ちなど自分の感情に関連する事柄を回答していることがうかがえた。

①は「自分のやりたいことができないとき」「何をやってもうまくいかないとき」「自分の意見を言えないとき」などに代表される，【自分のやりたいことができない。うまくいかない】という側面である。大学生という年代を考えると，物事の大半は自分で決めて実行していくことになるが，それが阻害されることに，彼らは「生きにくさ」を感じるようである。

②は「自分が否定されたとき」「自分に自信がもてないとき」「自分を素直に表現できない」などに代表される，【自分に自信がもてない】という側面である。大学生の一部が自分に自信を持てないでいることは，広く認識されていることである。また，臨床的な議論の中でも，対人恐怖症などに代表されるものは，自信のなさが根底にあることが指摘されている。自分に自信がもてないと学生自身が認識しているときに，彼らはそれを「生きにくさ」と捉えていることが推察される。

③は「自分のやりたいことが見つからないとき」「生きる意味がわからないとき」「自分という存在に疑問を感じたとき」などに代表される，【自分のやりたいことが見つからない。自分という存在がわからない】という側面である。①では「自分のやりたいことができない」という記述があったが，そのやりたいこと自体が見つからないこと，そして自分自身や生きる意味を見出せないときも，彼らはそれらを「生きにくさ」と捉えていることが推察できる。

④は「息苦しさがあるとき」「悩みがあるとき」「自分の気持ちと行動が一致せず，つらいとき」などに代表される，【身体および心の不調を感じる】という側面である。大学生女子に多い，摂食障害やリストカットに代表される心身症も，この側面に属すると思われる。自分の心身に不調を感じるときに，彼らはそれらを「生きにくさ」と捉えていることが推察できる。

⑤は「自分が納得していないことをしなければならないとき」「もうやっていられないと思うとき」「自分の辛い現実を無理に受け入れないとならないとき」に代表される，【自分の意に反することをしなければならない】という側面である。人間は誰しも自分の意に反することをしなければならないときが

Table 4

	カテゴリーを構成する側面	回答例
Ⅱ「自分と他者とのかかわりに起因する生きにくさカテゴリー」	**①他者や周囲との関係がうまくいかない**	・周囲の人と合わない ・誰からも仲良くされない ・人間関係がうまくいかない ・いろいろと周囲とズレを感じながら、生きているとき ・周囲の雰囲気になじめない ・周囲と意見が対立したとき ・親との関係がうまくいかない ・他者の役に立てなかったとき
	②他者や周囲から認められない。理解されない	・自分を理解してくれないと感じるとき ・周囲から認められないとき ・頼りにされないとき ・仲間外れにされたとき ・周囲から否定されたとき ・人から変な目で見られたとき ・周囲と調和を保てない
	③他者や周囲とのかかわりで無理をしなければならない。気を使わなければならない	・周囲を気にしなければならないとき ・嫌いな人が近くにいて接しないとならないとき ・自分よりも相手を立てなければならないとき ・自分が思うよりも周囲の評価が高すぎるとき
	④他者や周囲に行動や考えを押し付けられる	・友達から束縛されたとき ・誰かに行動を決められたとき ・親の言いなりになっているとき ・他人の価値観を押しつけられたとき
	⑤自分にとっての重要な他者がいない	・友達がいない ・頼れる存在がいない ・悩みを相談できる人がいないとき

あろうが，彼らはそれらについても「生きにくさ」と捉えていることが推察される。

Ⅱ　「自分と他者とのかかわりに起因する生きにくさ」カテゴリーについて（Table 4）

このカテゴリーはⅠに次いで，該当する自由記述数が多かった。

①は「人間関係がうまくいかないとき」「周囲と意見が対立したとき」「周囲の雰囲気になじめない」などに代表される，【他者

や周囲との関係がうまくいかない】という側面である。人間関係を築くことや，その関係を維持していくことが困難であるのは，何も青年期だけの特徴ではない。だが，大学生においては特に他者や周囲との関係がうまくいかないことが，「生きにくさ」と捉えていることが推察された。

②は「自分を理解してくれないと感じるとき」「周囲から認められないとき」「頼りにされないとき」などに代表される，【他者や周囲から認められない。理解されない】という側面である。他者や周囲から自分を認めてもらえないと感じることは「自分は自分らしくてもいいんだ」と思えず，ひいては自尊感情等の低下を招く。このような「他者から認められない」ということを「生きにくさ」と捉えていることが推察できる。

③は「友達に気を使わなければならないとき」「自分よりも相手を立てなければならないとき」「嫌いな人が近くにいて，接しなければならないとき」などに代表される，【他者や周囲とのかかわりで無理をしなければならない。気を使わなければならない】という側面である。Ⅰの⑤と似ている面があるが，Ⅰ－⑤は「自分が意に反することをしなければならない」というように「自分」からみた立場であるのに対して，この側面は「他者や周囲のかかわりにより，無理をしなければならない」という，「他者や周囲のかかわり」が中心にある。「他者や周囲」という存在が自分に無理を強いるような状況に追い込むようなとき，学生はそれらを「生きにくさ」と捉えていることが推察された。

④は「他人の価値観を押し付けられたとき」「他人から束縛されたとき」「誰かに行動を決められたとき」に代表される，【他者や周囲に行動や考えを押し付けられる】という側面である。この側面はいわば半強制的に他者や周囲から行動や考え方などを押し付けられるというものであり，それらを「生きにくさ」と捉えていることが推察された。

⑤は「友達がいないとき」「悩みを相談できる相手がいないとき」「頼れる存在がいないとき」に代表される，【自分にとっての重要な他者がいない】という側面である。Ⅱ－②は「他者や周囲から認められない」というように，認められないことが「生きにくさ」につながっているようだが，それでも，「他者」や「周囲」という存在が前提にある。しかし，この側面では，そもそもそのような「他者」の存在がないということが特徴であり，それらを「生きにくさ」と捉えていることが推察できた。

Ⅲ 「自分と社会・環境とのかかわりに起因する生きにくさ」カテゴリーについて（Table 5）

このカテゴリーは，ⅠやⅡほどは自由記述の回答が多くなかった。

①は「お金がない」「食べていけない」「生活環境が整っていない」に代表される，【衣食住などの生活環境が満たされていない】という側面である。マズローの欲求段階説の最下部にある「生理的欲求」は衣食住等の生きる上での根源的欲求であり，この側面もマズローの「生理的欲求」につながるものと思われる。このような衣食住などの生活環境が満たされていないことが，「生きにくさ」と捉えていることが推察された。

②は「自分に合った道に進めないとき」

Table 5

	カテゴリーを構成する側面	回答例
Ⅲ「自分と社会や環境とのかかわりに起因する生きにくさカテゴリー」	**①衣食住などの生活環境が満たされていない**	・お金がない ・食べていけない ・生活環境が整っていない
	②将来への不安	・自分に合った道に進めないとき ・将来に見通しがもてない ・単位が取れず、留年しそうなとき ・自分のやりたい仕事ができるかどうか不安なとき
	③社会や環境への適応に関すること	・我慢しながら生きないとならないとき ・社会に適応できない ・アルバイトがうまくいかない ・自分の居場所がない ・社会に出なければならない
	④差別や偏見、制約を受けること	・男女差別を感じたとき ・障害による差別を感じたとき ・学歴などで自分を判断されるとき ・見た目で判断されたとき
	⑤日常の生活における不便さ	・自然が近くにない ・車の渋滞 ・レポートの〆切に追われる

「将来に見通しが持てないとき」「単位がとれず，留年しそうなとき」に代表される，【将来への不安】という側面である。自分自身がどうなるのかがわからない，自分の希望する進路に進めるのかわからないといったことが，「生きにくさ」と捉えていることが推察された。

③は「我慢しながら生きなければならないとき」「アルバイトがうまくいかないとき」「この社会に自分の居場所がないこと」などに代表される，【社会や環境への適応に関すること】という側面である。適応的に生きること，生活していくことの困難さが，「生きにくさ」と捉えていることが推察できた。

④は「見た目で判断されたとき」「男女差別を感じたとき」「学歴などで判断されとき」に代表される，【差別や偏見，制約を受けること】という側面である。差別や偏見によって制約を受けることが，「生きにくさ」と捉えていることが推察された。

⑤は「自然が近くにない」「車が渋滞したとき」「レポートの締め切りに追われたとき」などに代表される，【日常生活における不便さ】という側面である。回答数は多くなかったが，このような日常生活における不便さが，「生きにくさ」と捉えていることが推察された。

3．全体的考察

大学生の捉える「生きにくさ」の構造に関しては，3つのカテゴリーに分けられ，各カテゴリーごとに5つの側面を見出すことができた。

自由記述方式による回答数が最も多かったのが，Ⅰの「自分の思いや気持ちに起因する生きにくさ」カテゴリーであった。青年期の人間が「生きにくさ」について考える場合，自分自身の思いや気持ちといった感情が大きく影響していることが推察される。つまり，自分の思いや気持ちが伝わらなかったり，それがわからなくなったり，自分の感情を抑えないとならないような場合に，特に「生きにくさ」を感じていることが示唆された。

表現を変えると，自分らしく生きることを阻害されたときに，大学生は「生きにくさ」を感じているといえよう。これはエリクソンの「アイデンティティ対アイデンティティの拡散」とよばれる，自分自身が自分のありたいような自分となれているかを模索している青年期の特徴とも合致するのではないだろうか。

また，Ⅱの「自分と他者とのかかわりに起因する生きにくさ」カテゴリーもⅠに次いで該当する自由記述数が多かった。人間は他者とのかかわりを通して新たな自分を知り，そして自分を高めようとするものであろう。その他者との関係が不調であれば，青年期では「生きにくさ」を感じることが示唆される。

言い換えると，他者と協同して生きることができないときに，大学生は「生きにくさ」を感じているといえよう。

最後に，Ⅲの「自分と社会・環境とのかかわりに起因する生きにくさ」カテゴリーについて回答数は多くはなかった。だが，先にも述べたように「(生きにくさが) ある状況の中でそれとの関係で生じてくるもの」という藤野の考えにしたがえば，ⅠもⅡも大きな意味では「自分と社会や環境とのかかわりに起因する生きにくさ」ともいえよう。ただ，Ⅰは「自分の感情」に，Ⅱは「自分と他者とのあり方」に重点が置かれており，このⅢはそのいずれでもなく，「自分と社会や環境とのあり方」に視点が向けられていることが特徴といえよう。

衣食住といった基本的な生活環境から，差別等で制約を受けることなど，このカテゴリーは多岐にわたっていた。そのような中で，青年期ではいわゆる社会や環境とのかかわりにおける「生きにくさ」を感じていることが示唆される。

言い換えれば，社会や環境がその個人の求めるニーズに大きくかけ離れたときに，大学生は「生きにくさ」を感じているといえよう。

Ⅳ　まとめと今後の課題

以上，大学生の捉える「生きにくさ」の構造について検討してきた。

本来，生きにくさというものはその個人がもつ主観的な概念であるが，それが社会や環境の影響によって，ある人には「生きにくさ」という形で生じさせるものであると考えられる。また，社会や環境の影響によって生じた「生きにくさ」がある個人と「他者」とのかかわりにおいて，そしてその人自身の思いや気持ちといった感情と結びついて，ますます「生きにくさ」感とよばれるものが強くなっていくことが推察できる。

生きにくさを抱えた青年期の人間への支援

方策を考える上でその基盤となるものは，次のようなことであろう（Table 6）。これは村瀬（2006）の心理的援助における生活を支える視点が重要であることとつながるものと思われる。

Table 6

・生きにくさを抱えた本人の思いや気持ちといった感情に焦点を当てていくこと（Ⅰによる）
・生きにくさを抱えた本人と他者との関係の調整を図ること（Ⅱによる）
・生きにくさを抱えた本人の，社会的環境の調整を図ること（Ⅲによる）

最後に，本研究では，ＫＪ法を用いて分類したものの，必ずしも十分に整理できていないところが認められる。データ数を増やし，さらに分析検討することで，これまで以上に「生きにくさ」についての構造を明らかにすることができると思われる。

付記

本研究は平成19年度北翔大学人間福祉学部における学部教育研究促進費の助成を得て実施された。

Ⅴ 文　　献

土井隆義　2006　アノミー化する「個性」と親密圏の変容―若者の「生きづらさ」をめぐって．　立命館産業社会論集，128, 118-126, 146-149.

藤野友紀　2007　「支援」研究のはじまりにあたって－生きづらさと障害の起源－　北海道大学子ども発達臨床研究創刊号　45-51

飯田昭人　2007　第９章司法・矯正領域における心理臨床の展開　村瀬嘉代子監修，佐藤隆一　他編『統合的心理臨床への招待』ミネルヴァ書房　205－223

岩波書店　1997　特集＜生きにくさ＞という問題．世界，632, 101-165.

川喜田二郎　1996　川喜田二郎著作集第５巻 KJ 法－混沌をして語らしめる－　中央公論社

村瀬嘉代子　2006　心理臨床という営み－生きるということと病むということ

室橋春光　2007　生きにくさを抱える子どもたち－生物学的基盤から社会的環境まで－　北海道大学子ども発達臨床研究創刊号　11-17

永石晃　2007　重複聴覚障害をかかえる児童・青年期の人々とその家族への支援－子どもと家族への教育的・心理的支援の実践と展開－　日本評論社

中井久夫　1991　大学生の精神保健をめぐって『中井久夫著作集６巻個人とその家族』岩崎学術出版社

佐藤祐基　2006　大学生の不安と認知行動的変数についての因果モデルの検討　浅井学園大学人間福祉研究第9号　129-142

滝川一廣　2004　青年期境界例『新しい思春期像と精神療法』金剛出版

田中康雄　2007　子どもたちの「生きづらさ」を考える：児童精神医学の視点から　北海道大学子ども発達臨床研究創刊号　3-10

田中康雄　2005　AD／HD 臨床から―　生きにくさの検討．小児の精神と神経，45(4)，326-330.

"Pain of Living" with Adolescents : A Qualitative Analysis

Akihito IIDA, Yuki SATO, Takanori SHINKAWA, Naoki KAWASAKI

ABSTRACT

The purpose of this study was to clarify the structure of the "Pain of living" among undergraduate students. A questionnaire was administered to 117 students (36 males, 81 female ; mean age 20.4 years ; SD = 1.13 years). The results indicated that the structure of Pain of living among undergraduate students comprised of 3 categories with five subgroups in each category. The three categories were : "Pain of living that originates in own thinking and feelings," "Pain of living that originates in relations between self and others," and "Pain of living that originates in relations between society and environment and the self." The three categories were found to influence each other. These findings suggest that it is helpful to know the structure of Pain of living, in order to determine how students can be supported.

Key words : Adolescents, Pain of living